

技能教科の協同的な学び

Dec 2011

村瀬公胤 麻布教育研究所

技能教科とは

- 音楽、図画工作、家庭、体育、技術、美術、
- 英語、（情報、）

- 学習内容において技能 (skill) の重要性が高く、練習 (exercise) を必要とする
 - すべての教科に skill の側面はある

- 協同学習がデザインしにくいと思われてきたが、近年、実践例が蓄積されてきている

技能教科の特性

- 身体活動を多く伴う
- アイデンティティと深く関わる
 - ▣ 「○○嫌い」をつくりやすい
 - ▣ 「苦手意識」をもちやすい
- センスや才能で決まると思われがち
- 反復練習で克服されると思われがち
- 科目としての位置づけが不安定
- 言語で媒介する活動の必要が認められてきた

スポーツにおける言語の媒介

- 『「言語技術」が日本のサッカーを変える』
田嶋 幸三 (著) (光文社新書)

「そのプレーの意図は?」と訊かれたとき、監督の目を見て答えを探ろうとする日本人。一方、世界の強国では子どもでさえ自分の考えを明確に説明し、クリエイティブなプレーをしている。

日本サッカーに足りないのは自己決定力であり、その基盤となる論理力と言語力なのだ。

技能教科で学び合う意義

- 支え合うことの情緒的意義
 - ▣ 勇気を出せる、安心できる、苦しさを乗り越える
- 見合うことの技術的意義
 - ▣ 相互モニタリング、相互コーチング
- 考え合うことの文化的意義
 - ▣ 「美」、「善」などの価値について学ぶ

具体的な形態として

- ギターの二重奏から
 - ペアの練習
 - 聴き合う関係
 - 拍をとる（配慮）、呼吸
- 4人で開かれる地平

ペア

安心のホームポジション
ケアの空間
スキルアップの支え合い

4人

深まる対話の場
学びの空間
探究と挑戦のチーム

乗り越えるべき課題

- 「工夫」というマジックワード
- 「話し合い」という罫
 - 何を、どう工夫するのかについて、具体的な視点を提供する必要がある
 - スキルを言語で置き換えてはいけない
 - スキルを媒介する言語の使用に慣れる必要がある
 - 視点と場の設定については、徹底的に教師が関与するべき（教材研究）

スキルの扱いかた：合唱の例

- スキルを課題に埋め込む
 - 「二種類の声を出してね」 (<> 「声を響かせましょう」)
 - 活動のなかで発見する
 - さらに、言語化させる
 - 協同でふりかえり、鑑賞しあう
- スキルを教え、スキルを考えさせる
 - 「バスケットのゴールのように」
 - (協同の智恵の出しあい)

スキルの扱い方： ベースボール型の例

□ 創造性

- 技術の習得を、「訓練」ではなく「探究－フィードバック」の連続へと転換する
- 作戦、ルールというものを所与のものとして扱うのではなく、発見的・構成的に扱う

□ 協同性

- 相互的な「探究－フィードバック」、「気づき」の交換および交歓としての体育
- チームの作戦の愉しさ (tactics based)

能力差をどう考えるか

- 共有としてのリテラシー
 - (体育リテラシー：) 自らの身体を十全に動かす目的の活動を通して、心身の健やかさを保ち、社会生活に参加し、文化を享受するための能力
 - 達成課題、克服課題は個人ごとに設定される
 - 挑戦と超克を分かち合う学びに
 - 「できる」ことへの健全な憧れ = 尊敬
 - 仲間の善さや美しさを認めることができる
- 